

私の召出の歩み

第2巻

上智大学赴任から（1959年）

## 序文

ポルトガル・ブラジルセンター（1959年設立）とポルトガル語学科（1964年設立）を創設したヴェンデリーノ・ローシャイタ神父は、1992年、イエズス会士になって50年の佳節を迎えられました。

同年、センターが発行していた *Noticias do Japão* というニュースレターに、それまでの貴重な軌跡を綴った連載を始められました。

2001年には、ローシャイタ神父の1942年から1959年までの活動に言及した第1巻の自伝が、その後名称を改めたポルトガル・ブラジル研究センターより出版されました。

2008年4月に再度改名したポルトガル語圏研究所より、研究所発足50周年にあたる2009年に、1959年から今日までを回顧された自伝の第2巻を、研究員の総意のもと発刊する運びとなりました。

神父のご意向により、第2巻では、日本で発行されているポルトガル語新聞に掲載された神父に関する記事も巻末に転載しています。これらの記事を通し、神父が在日ブラジル人コミュニティにおいてきわめて重要な役割を果たされていることがおわかりいただけるのではないのでしょうか。

私どもの大学の名誉教授でセンター長も務められ、前回に引き続き日本語への監訳をお引き受けいただいた水野一先生に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。また、研究所秘書で翻訳および出版にあたっての実務を担当された拝野寿美子さんに感謝いたします。

最後に、現所長として、神父の自伝を刊行できることを大変に嬉しく思います。神父がいらしたからこそ、私どもの大学の学生への、ポルトガル語とブラジルに関する知識の普及が可能になったからです。

2009年1月

ポルトガル語圏研究所

所長 マウロ・ネーヴェス

私の召出の歩み  
第2巻  
上智大学赴任から（1959年）

ブラジル向け日本移民の手助け

当時、東京ではかなりの日本人がブラジルへの移住についての情報や手助けを上智大学に求めてきていました。それまでに既に多くの日本人がブラジルに渡っており、比較的良好で満足のいく生活をあちらで送っていました。しかしながら、上智大学では当時はブラジル移住を手助けすることができる者はありませんでした。

そのようなことから、ブラジル移住の仕事を担当するために、私が広島から東京に呼び寄せられたのでした。こうして、1959年4月、私はそれまで行くとは想像もしていなかった上智大学に赴任することとなりました。

ブラジルへの渡航を希望している日本人を手助けするほか、教員として大学生向けに英語やドイツ語、宗教に関する授業を担当することとなりました。

ポルトガル・ブラジルセンター創設（1959年）

しかしながら、ブラジルに興味を抱いている日本人を手助けするという私の計画も実行しなければなりませんでした。そのため、上智大学にポルトガル・ブラジルセンターを開設し、ポルトガル語の夜間講習を始めたのです。これも1959年のことでした。センターには、多くの言語で書かれたブラジルに関する書籍や雑誌、教材などを配架しました。中には日本語で書かれたものもありましたが、私は日本人向けのポルトガル語学習の教科書を書くことにしました。

このセンターは、今日まで存続しており、日本語を含む多くの言語で書かれた豊富な文献を揃えています。これらは、ブラジルの言語、文化の他、ブラジルに関連する事柄について書かれたものです。

このセンターは上智大学の学生のみならず、ブラジルに興味を持つすべての人々に開かれています。一般に開かれたポルトガル語の夜間コースも続いています。

センターの目的の一つに、多くの国々との良好な関係づくりを促し、発展させることがあげられています。これは神と隣人に愛を広げ、強めるというカトリックの教義がベースとなっています。

私は1959年の創立からポルトガル・ブラジルセンターの所長を務め、1992年にポルトガル語学科の別の教員と交代しました。上智大学ポルトガル語学科の教員としての定年退職が近づいていたからです。後述しますが、送別と所長交代の会で、所長として33年間仕事をするにあたって、センターの活動を維持、発展させるために、特に、ポルトガル語学科の先生方やセンターの秘書の皆さんから受けた協力や貢献に対して、心からの感の気持ちを伝えました。

上智大学ポルトガル語学科創設（1964年）

ポルトガル・ブラジルセンターの活動を数年にわたり見極めていくなかで、上智大学当局は私を呼び出し、「あなたが創設したポルトガル・ブラジルセンターはなかなか良い活動をしているのでそのまま続けてください。その上で、外国語学部にもポルトガル語学科を作ってははどうでしょうか。すでに英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語の5学科があります。ポルトガル語学科を増設するというのはいか

がでしょうか」と持ちかけました。

私は、やってみましょうと答えました。しかしながら、本当にできるのか、いつできるのかなど全くわかりませんでした。当局は喜び、まだ、時期を確定しなくても結構です、でも創設にむけて動いてみてくださいと答えてきました。心臓の鼓動は高鳴りましたが、やってみましょうと答えてしまったのです。こうして、まずはブラジル人、ポルトガル人、日本人の教員探しを始めました。当時必要とされていた、日本政府の認可を得るための提出書類も準備しました。「上智大学ポルトガル語学科」というタイトルの書類を提示したところ、責任者は即座に反応し、「あなたはポルトガル語学科を開設したいのですか？私どもはポルトガルに関心はありませんから、このような学科は必要としていません」と言われました。私は、ポルトガルだけを扱うのではなく、対象とするのは主にブラジルと対日関係であることを説明しました。すると責任者は「だったら良いと思います。私どもも関心のあるところです。なぜブラジル語学科としないのですか」と聞くので、ブラジルで使用されている言語はポルトガル語であることを説明しました。担当者は、日本ではほとんど知られていないので、書類のまえがきにポルトガル語がブラジルで使用されている言語であることを説明するべきです、と助言してくれました。

こうして、日本政府の認可を得ることができ、必要な教員との契約も終え、図書室や必要なものを設置して、1964年にポルトガル語およびポルトガル・ブラジル研究を専攻する学科を開設するという上智大学の許可を得るに至りました。

実のところ、1957年に、ブラジルのリオ・グランデ・ド・スル州出身のジョゼ・アウリ・ブラントというイエズス会の青年神学生が来日していました。彼は、日本語を学び、日本で宣教師としての仕事をするために、もう一人の仲間と共に来日したのです。

どうやらその当時から、上智大学では、外国語学部におけるポルトガル語学科開設の機会と可能性が検討されていたようです。

ポルトガル・ブラジルセンターの資料をひも解くと、まだ学生であったジョゼ・ブラントが、上智大学に「間もなく」開設される未来のポルトガル語学科のために書籍や雑誌を収集する目的で、個人、研究所、本屋やブラジル政府の省庁にあてた20通もの書簡や長い住所リストに出会います。ブラントの最初の書簡は1958年1月22日付けのブラジル地理統計院あてのものです。この書簡でブラントは、イエズス会の大学である上智大学は日本人が既に多く移住しているブラジルに関心を持っていることから、ポルトガル語学科を開設する考えがあると説明しています。ブラントは神学の勉強とブラジルに住む日本人と接触するために、1959年ブラジルに帰国しています。残念なことに、彼はリオ・グランデ・ド・スル州のある日本人入植地を訪問する際、事故に遭って亡くなりました。1969年のことです。ここに、彼が遺した未来のポルトガル語学科への先駆的な仕事を記し、私たちの感謝の意を示したいと思います。彼は個人的には学科の創設を見届けることはできませんでしたが、常に多大な関心を示し、最後まで価値ある協力を惜しみませんでした。

### ポルトガル語学科の歴史的努力

1930年、ブラジル向け日本人移住が頂点に達した時期、上智大学元学長のヘルマン・ホイヴェルス・イエズス会士はローマにあるイエズス会本部に手紙を書き、ブラジルにおける移民の状況を伝えました。その手紙の中で元学長は、上智大学におけるポルトガル語教育の重要性と日本とブラジルの関係に関する研究の必要性を主張しました。しかし、前述のように、上智大学でポルトガル語の授業をいくつか担当

し、ポルトガル語学科創設の可能性を見極めるためにイエズス会の神学生が呼ばれたのは、1958年になってからのことでした。

しかしながら、翌1959年にはブランドはブラジルに帰国してしまったことはすでに述べたとおりです。それから、上智大学でブラジル研究を始めるために私が呼ばれたこともお話ししました。

こうして、多くの困難と要求をクリアしながら、1964年、一期生となる41名（男性33名、女性8名）が、160名の受験者の中から合格し、学科に入学しました。

ポルトガル語学科は発展を続け、現在では50名の定員に対して200名以上が受験しています。

学科はブラジルやポルトガルの大学と学術交流協定を結んでおり、毎年一定数の学生がこれらの大学でポルトガル・ブラジル文化に触れ、経験を積んできています。

また、学科により、日本ポルトガル・ブラジル学会（AJELB）が発足しました。この学会は、様々な分野のポルトガル、ブラジル研究者や教員によって構成されています。ANAISという年刊誌も発行しており、会員の論文や研究などが掲載されています。

これらの他にも様々な活動を通し、学科はその使命である日本におけるポルトガル・ブラジル研究を促進し、日本とポルトガル語圏諸国との交流に貢献することで、全ての人々の幸福のために相互理解と相互協力の絆を深めてきました。

上智大学当局や教員仲間に対し、私が受けた素晴らしい支援に心から感謝申し上げます。

#### その他の活動

ポルトガル・ブラジルセンターやポルトガル語学科のこれらの活動の大部分は、もちろん、年を経るに従って変化したり、更新されたりしながら継続しています。

しかしながら、私個人としては、1994年に70歳を迎えたことで大学の仕事にはピリオドを打ち、定年退職を迎えました。その際、上智大学名誉教授の称号を授与されました。

上智大学における35年の間も、並行して聖職者、宣教者としての宗教および司牧活動を行い、教員や学生、ポルトガル語を母語とする人々にむけた聖ミサをあげてきました。その他、洗礼、告解、結婚式などの儀礼も行ってきました。実際、カトリックの信者ではなくても多くの日本人がカトリックでの結婚式を頼みに来ます。日本で信者ではない人々の結婚式を取り行うことについては、事前に式の意義を理解してもらうために準備期間をもうけることを条件に、ローマからの許可を得ています。さらに、学生や関心のある人々を対象に、聖書やその他の宗教的事項に関する勉強会も行ってきました。

1960年には、日本司教協議会により、日本カトリック移住協議会のメンバーとして参加するよう誘われました。この協議会はジュネーブに本部を持つ国際カトリック移住協議会の支部です。

その後、国際協力のために、日本カトリック委員会のメンバーにもなりました。

1982年には、海外宣教師支援のための日本カトリック海外宣教師を支援する会の創設を手助けすることにもなりました。2001年からは、この協会の会長を務めています。日本の教会から、ブラジルを含めて世界60カ国以上に、350名を超える宣教師が派遣されています。この会には、素晴らしい組織委員会があり、2,534名の会員が協力してくれています。宣教師たちを財政面だけでなく、社会的、精神的にも支えていくことを目的としています。

## ブラジル人への司牧活動とその他の活動

現在、私の中心的な仕事は、特に東京周辺におけるブラジル人への司牧活動です。現在日本に住むブラジル人は31万7千人を超え、朝鮮半島出身者、中国人に続き第3に大きい外国人グループとなっています。東京に住むブラジル人はそれほど多くはありません。多くが東京を出てブラジルに帰国したり日本の他の地域に転出したりしています。その理由として、東京の物価高や良い雇用先を得ることが困難であることなどがあげられます。

今のところ、毎週日曜日にブラジル人や興味のある人々にポルトガル語でミサを立てています。カトリック信者であるブラジル人の多くが日曜日にも働かなければならず、ミサに参加できないことが課題です。正午にミサをたて、その後は通常、聖書やその時々起こった出来事などについて勉強会を行っています。週日についても特別なミサを立てたり、会って話したり相談にのったりするために時間をあけています。

現在私は84歳になりますが、神が力を与えてくださり、聖母マリアが私を支えてくださるうちは、このようにして、私の宗教および宣教活動は継続していきます。

## 心から感謝を込めて

何よりもまず、神に、救世主イエス・キリストに、そして聖母マリアに、私に宗教者、宣教者として召し出だしてくださったことを心より感謝いたします。私は9歳か10歳の子どもの頃からそれを感じていました。

次に、偉大なイエズス会宣教師であるサン・フランシスコ・ザビエルに対し、彼の人生と宣教師としての活動の伝記を通して、宗教者、宣教者として人生を捧げるために私をイエズス会に導いてくださったことに感謝いたします。

続いて、私の決意に賛同し、祈り、支えてくれた私の両親、兄弟、親戚、友人に感謝します。さらに、イエズス会の当局、首脳陣をはじめ、宗教者および宣教者としての召出において、私を教育、指導してくださった方々に心より感謝いたします。私をいつでも、どこでも支え、元気づけてくれたイエズス会の仲間にも感謝します。

私の宗教者、宣教者としての召出についてささやかな紹介を終えるにあたり、私を助けてくださった、そして今でも助けてくださっているすべての人々に、心より感謝いたします。皆様に神の祝福がありますように。

日本滞在中、様々な活動を通じて私が受けてきた、たゆみない素晴らしい手助けに対して、心から御礼申しあげます。おかげさまで、私は帰りたいたいと思ったり、場所や仕事を変えたいと思ったことはこれまで一度もありませんでした。司牧、宣教の仕事には常に素晴らしい秘書や手伝ってくれる人々がいました。

すべての人々に、神の祝福と償いがありますように。